



## 共同研究「植民地国家と近代性」

### —北タイ、チェンマイの宗教と社会変動—

高城 玲

2018年度から、アジア研究センターにおいて共同研究「植民地国家と近代性—アジア諸国を中心とする比較研究」（代表：永野善子人間科学部教授）が新たに立ち上げられた。この共同研究は、神奈川大学共同研究奨励助成や神奈川大学人文学研究所などによるこれまでの共同研究を踏まえていると言えるだろう。すでに永野善子編著『植民地近代性の国際比較—アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』（御茶の水書房、2013年）、永野善子編著『帝国とナショナリズムの言説空間—国際比較と相互連携』（御茶の水書房、2018年）などの成果も刊行されている。新たな共同研究では、その先に今日の現代的状況を踏まえながら、アジア諸国を中心とする植民地支配やポストコロニアルを含めた擬似的な植民地状況の経験が、各地の近代国家形成のありようと如何に関わっているのか、具体的に検討していくものと考えられる。

ここで紹介する研究会報告は、その第1回目の研究会にあたり、福浦一男氏（桐蔭横浜大学）をスピーカーにお招きして2018年7月14日に開催された。福浦氏は、比較社会学、文化人類学を専門とし、タイ北部チェンマイ県での長期のフィールドワークを踏まえた成果『霊媒のいる街—北タイ、チェンマイの宗教復興』（春風社、2016年）を刊行されている。

今回の報告では「北タイ、チェンマイの宗教と社会変動—歴史的パースペクティブから」と題して、北タイの「伝統宗教」である上座部仏教、精霊信仰、霊媒術が、歴史的な王朝時代から植民地主義の影響を経て、現代にいたるまで、社会変動とどのように関係してきたのか、長期にわたる歴史的パースペクティブから整理、検討された。

特に、タイは制度的には植民地化されなかったことも影響し、他のアジア諸国と比較すると

植民地主義に関する議論が少ない状況の中で、福浦氏は、サンガ法による上座部仏教の法制化や、精霊信仰の抑圧などから、植民地主義の影響を看過し得ないことを示した。加えて、タイにおいては中央バンコクとそれ以外の北タイ、東北タイなどの地方との間に、差別構造を含んだ国内植民地主義が存在するとして、近代において中央のシャム王国に地方が併合される過程と北タイの「伝統宗教」との関係に焦点を当てた事例が紹介された。

ここで指摘された国内植民地主義という概念は、西欧諸国による植民地主義と複雑に絡み合いながら、20世紀末以降の北タイにおける「伝統宗教」の動向にも影響を及ぼしているという視点にもつながっていく点で、学ぶことが多かった。特に、20世紀末以降における都市化と近代化の波が、北タイの「伝統宗教」において多様化・混淆化・ハイブリッド化をもたらし、現象として霊媒術の復興を生み出しているとの指摘は、今後、今日的状況を踏まえながら、植民地主義や国内植民地主義との関係の中で改めて考えていく際のひとつの論点ともなっていくだろう。

他方で、研究会でも指摘されたように、何を、あるいはどこまでを「植民地主義」として定義し、議論の対象としていくか、個別の研究を土台にしながら共同研究全体で相互に対話していくことも、もうひとつの課題となっていくと思われる。今後予定される3年間の共同研究で、各地域の報告を軸に、そうした対話が活発にされることを楽しみにしたい。

（所員 経営学部教授）